The Japanese Journal of Experimental
Social Psychology. 1985, Vol. 24, No. 2, 127—134

〔原　　著〕

恋愛関係における Equity 理論の検証

関西学院大学
井　上　和　子

人間の社会的行動がどのように起こされるのかという問題は，社会心理学の主要題目の1つである。Homans (1961, 1974) は，その著書「社会行動—その基本形態」において，5つの命題を挙げて，社会行動の一般理論の樹立を試みているが，これらの命題は大きく分けて2つにまとめて把えることができる。その1つは，彼自身が1974年の改訂版でいうところの「合理性命題」(Rationality Proposition) であり，他の1つは，「分配公正」(Distributive Justice) に関するものである。「合理性命題」とは，“選択的な諸行為の中から人は行為結果の価値Vにその結果を得ることでの確率Pを掛けたものが他より大きいと知覚される行為を選択する” (Homans, 1974：橋本訳 p. 63) というもので，これは，Edwards (1954) や，Rosenberg (1956) や，Fishbein (1975) の，いわゆる「期待—価値モデル」の意味するところと同じ内容を有するものである。「分配公正」とは，“人は，社会的交換の中で，個々人がなす貢献とその人がその交換から得る利得 (profit＝reward-cost) との割合が等しくなるように報酬が分配されるよう期待しており，この期待に反した分配が行なわれた時，injustice を感じる・・・相対的に有利な分配を受けた人は何らかの罪を，相対的に不利な分配を受けた人は何らかの怒りを経験する” (窪田，1979) というもので，Equity 理論に発展するものである。すなわち，合理性命題では利得最大の原理に基づいて選択が行なわれるのに対し，分配公正では必ずしもそうではなく，公平 (Equity) の原理に基づいて選択が為されるというものである。これら2つの命題は一見相矛盾するとも考えられるが，いずれも一般性のある原理として強い説得力を持つ。合理性命題に関しては既に多くの実証研究の結果がこれを支持している (Mitchell, 1974) が，分配公正，すなわち，Equity 理論に関しては，実証研究の多くが，遂行 (performance) や努力 (effort) などの Inputs と，金銭もしくはこれに代る Outcomes を，いずれも実験的に操作して inequity を生じさせるか，あるいは，単にどちらか一方を独立変数に他方を従属変数にしたもので，Equity 理論が行動決定論的に支持されたというには情報が十分に得られているとはいえないのである。

しかしながら，近年関心を集め始めた親密な関係，特に，恋愛・夫婦関係への Equity 理論の適用を試みた諸研究には興味深いものが見られる。例えば，恋愛関係にあるカップルはお互いに“社会的望ましさ” (social desirability) の点で釣り合っているという“Matching Hypothesis”を扱った Feingold (1981) の研究では，男性の方がより身体的に魅力的である場合その相手の女性は，よりよいユーモアのセンスを持ち，より神経症的でなかったことを見出している。また，Walster, Walster & Traupmann (1978b) は，認知された inequity の程度を5段階に分け傾向分析をした結果，inequity に伴う情緒的反応が2次傾向を示すことを見出しており，さらに，性交渉や関係の持続にまで分析を進めている。これらはいずれも現実場面での実証研究である点が注目される。

恋愛関係は比較的持続するものである一方，時間に伴う変動が大きいという点で力動的な交換関係である。従って，Equity 理論をこれにあてはめる場合，比較的無理なく全ての要素の変化が観察可能であること，特に，inequity 低減の方法に関する仮説を，これまで十分な研究が行なわれてこなかった現実の行動において検討することができるということなどから，今後研究者の関心を集めるものと考えられる。

Adams (1965) は，Homans (1961) の分配公正の原理を認知的不協和理論 (Festinger, 1957) を援用して発展させ次のように主張する。すなわち，1. inequity は緊張 (tension) を生じ，その強さは inequity の程度に比例する，2. 緊張は解消に向って動機づけられ，その動機づける力は緊張の強さに比例する，というものである。さらに，inequity の解消もしくは低減の方法として，1. 自分や相手の Inputs や Outcomes を変化させる，2. Inputs や Outcomes に関する認知を歪める，3. 交換関係を断ってその場を離れる，4. 比較の相手を変える，を挙げ，Equity モデルをより具体的に適用可能

なものにしている。inequity 解消の方法のうち，1と3は行動的な，2と4は心理的な方法として二分される。また，認知的不協和理論に関連させていえば，1と3は行動の認知的要素の変化，2は環境の認知的要素の変化，4は新しい認知的要素の付加に相当する。

Walster, Walster & Berscheid (1978a) は，さらにこれを発展させ，より精緻なモデルを構築している。彼らによれば，“公平な関係は，その関係を吟味した結果すべての参加者がその関係から等しい相対的利益を受取っていると結論ずけられるときに成立する”(p. 10) のであり，式 (1) で表わされる。

$$\frac{(O_A-I_A)}{(|I_A|)^{k_A}}=\frac{(O_B-I_B)}{(|I_B|)^{k_B}} \qquad (1)$$

I_A, I_B：吟味者によって認知されたAまたはBのInputs

O_A, O_B：吟味者によって認知されたAまたはBのOutcomes

k_A, k_B：+1 か −1 のどちらかの値をとるベキ指数で $I_A, I_B, (O_A-I_A), (O_B-I_B)$ の符号によって決まる。すなわち，$k_A=\mathrm{sign}(I_A)\times\mathrm{sign}(O_A-I_A)$，$k_B=\mathrm{sign}(I_B)\times\mathrm{sign}(O_B-I_B)$

本研究では，Equity 理論に焦点を当て，その主張するところを Walster *et al.* (1978a) に基づき，これを恋愛関係にあてはめ，認知される inequity の程度によって心理的変数がどのようにちがうかをみると同時に，equity 回復の方法も含めて Equity モデルの妥当性を検討する。特に，equity 回復の方法に関しては，行動的な方法の検証を試みる。従って，仮説は次のように立てられた。仮説1．恋愛関係において，認知される inequity の程度が大きければ恋人たちの感じる心理的緊張も大きいであろう。仮説2．関係が inequitable であると認知する恋人たちは，equity を回復，または，inequity を解消する行動をとろうとするであろう。

方　　法

対象者　恋愛関係にある大学生男女各70名，計140名に対し調査が行なわれ，内有効数132名であった。恋愛関係の基準は，“恋愛関係にあることを双方が認め合っていること”とし，これは面接により口頭で確認された。対象者は，認知された inequity の程度により5群に分けられたが，各群の標本数を等しくするために標本が無作為に除かれ最終的な分析に用いられたのは男女各50名計100名（平均年齢21.17歳，平均交際期間16.14ヵ月）であった。

質問紙および尺度　質問紙は，1．equity-inequity の認知に関する尺度，すなわち，総 Inputs，総 Outcomes 評定尺度，2．情緒的反応の評定尺度，3．ISI (Increasing Self Inputs) 尺度，4．IPI (Increasing Partner's Inputs) 尺度，5．結婚の意図および交際期間に関する質問の5部分から成る。

1．認知された equity-inequity 値x：Walster *et al.* (1978b) に基づき対象者は equity-inequity 値xによって，極端な利得過剰から，若干利得過剰，公平，若干利得不足，極端な利得不足に至る5群に分けられた。inequity 値xは“過剰利得あるいは利得不足分と貢献度の比”で表わされ，式(2)と式(3)によって算定された。5群への振り分けの基準は Table 1 のとおり

Table 1
Range of Equity／Inequity Score

Groups	Range
GUB (Greatly Under Benefited)	$x < -.50$
SUB (Slightly Under Benefited)	$-.50 \leq x < .00$
EQT (Equitably Treated)	$x = .00$
SOB (Slightly Over Benefited)	$.00 < x \leq .50$
GOB (Greatly Over Benefited)	$.50 < x$

$$x=\frac{(O_A-\hat{O}_A)}{|I_A|} \qquad (2)$$

$$\hat{O}_A=I_A+\frac{|I_A|^{k_A}(O_B-I_B)}{|I_B|^{k_B}} \qquad (3)$$

である。測定は，自己の総 Inputs (I_A) について例示すれば，“全てのことをよく考えて，あなた方の関係で，あなたはどの程度尽くしていると思いますか”という質問に対して，“非常に尽くしている”(+4) から“まったく尽くしていない”(−4) までの0を除く8件尺度で測られた。同様に，報われているかどうか(O_A)，相手Bがどの程度尽くしているかの対象者Aの認知(I_B)，および，相手がどの程度報われているかのAの認知(O_B)が測定された。

2．情緒的反応：Mood Description Scales (Walster *et al.*, 1978a) を用いて測定された。①腹立たしさ (anger)，②申し分けなさ (guilt)，③満足感 (contentment)，④幸福感 (happiness) が，“非常に感じる”(4点) から“まったく感じない”(1点) の4件尺度で測られ，Total Mood Index (TMI＝③＋④−①−②) が算定された。

3．ISI (Increasing Self Inputs) 得点：恋愛関係における社会的交換に対して自己の Inputs(I_A) を高める

ことへの行動傾向を測定するためにリッカートタイプのISI 尺度が構成された。夫婦関係を対象に作成された行動のリスト (Walster *et al.*, 1978a) を参考にこれらを恋愛関係に変換したものである。"冗談など言って彼(彼女)を笑わせたり，ふたりの会話に様々な話題を提供する" など Personal な貢献4項目，"彼(彼女)がしてくれたことには必ず'ありがとう'という言葉を口に出して感謝の意を表わす" など Emotional な貢献11項目，"彼(彼女)の友人や家族などともうまくやっていく" など Day-to-day 的な貢献7項目の計3カテゴリー22項目から成っており，名項目について，現在あるいは近い将来においてそのような行動をとるかどうかが，"ありそうだ"(+4)から"ありそうでない"(−4)の8件で測定され，3つのカテゴリーの各平均値の合計をISI 得点とした。

4．IPI (Increasing Partner's Inputs) 得点：相手が自らの Inputs (I_B) を高める行動を取ってくれることへの期待を測定するために，ISI 尺度と同様な22項目から成る IPI 尺度が構成された。各項目は ISI 尺度の各項目を反転させたもの("相手に望む")であり，測定法は同じである。なお，尺度の信頼性係性 (Kuder-Richardson) は，ISI 尺度で r=.916, IPI 尺度で r=.872 と満足すべき値が得られている。

5．結婚の意図：inequity 低減の方法とも関連する関係の安定性を測るためには，もっと現実に即した質問項目から成る尺度を構成し，追跡調査を行なうのが望ましいが，本研究では諸般の事情から将来における結婚の意図を測るに留まった。"事情が許すなら，彼(彼女)と結婚しますか" を"ありそうだ"(+4)から"ありそうでない"(−4)の8件尺度で測定した。

6．交際期間：その他の変数として交際期間が月単位で測られた。

調査の実施 調査は，1979年11月，恋愛関係にあることが確認された者に対して，個別に，実験室他において質問紙法により実施された。

結　　果

Equity 理論に従えば，認知される inequity の程度が大きければ大きいほど人はより否定的な情緒的反応を示すことが予想される。これをみるために，inequity の程度(5段階)を変動因として，各情緒的変数について傾向分析した結果が Table 2 である。Fig. 1〜5 は素朴な形ではあるが結果を図示したものである。なお，情緒的変数 TMI に関する傾向分析において性の主効果および交互作用に有意な値が認められなかったので，結果は全体について報告する。まず，心理的緊張の度合いを表わす"腹立たしさ"，"申し分けなさ" と inequity の程度との関係をみると，共に有意な1次の傾向を示している(共に p<.005)。さらに Fig. 1 と Fig. 2 をみるとわかるように，"腹立たしさ" では右下り，"申し分

Table 2
Relationship Between Equity／Inequity of a Romantic Relationship and Mood (Trend Analysis)

Equity／Inequity	n	Angry (A)	Guilty (G)	Content (C)	Happy (H)	Total Mood Index (C+H−A−G)
GUB (Greatly Under Benefited)	20	2.75	2.10	2.75	2.75	.65
SUB (Slightly Under Benefited)	20	2.50	2.15	3.05	3.10	1.50
EQT (Equitably Treated)	20	2.25	2.70	3.35	3.35	1.75
SOB (Slightly Over Benefited)	20	1.85	2.70	3.60	3.60	2.65
GOB (Greatly Over Benefited)	20	2.15	2.85	2.85	2.95	.80
Source	***df***			***F* Values**		
Between	4	4.89*	2.77	6.78**	4.24*	4.17*
Linear trend	1	14.26***	9.59***	3.06	3.09	1.35
Quadratic trend	1	2.69	.20	17.98***	10.89***	10.38***
Cubic trend	1	2.04	.28	5.44*	2.44	2.98
Quartic trend	1	.60	1.00	.63	0.54	1.99
Within	95					
Total	99					

* p<.05
** p<.01
*** p<.005

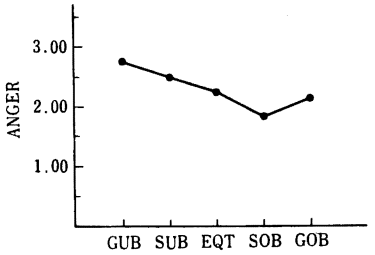

Fig. 1.　Equity/Inequity and Anger

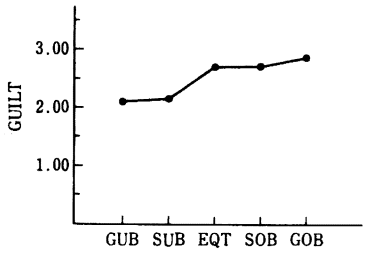

Fig. 2.　Equity/Inequity and Guilt

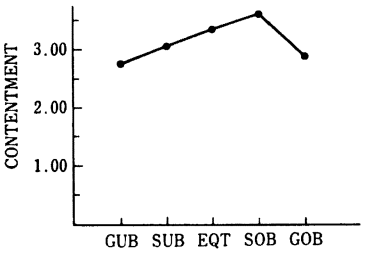

Fig. 3.　Equity/Inequity and Contentment

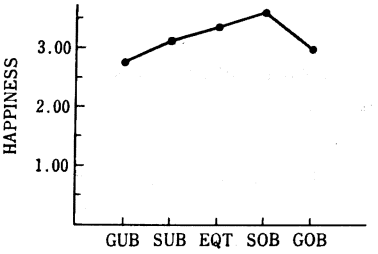

Fig. 4.　Equity/Iequity and Happiness

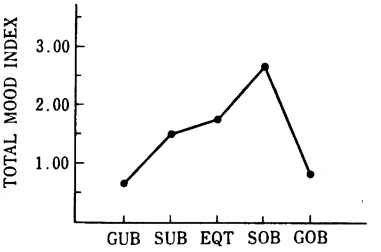

Fig. 5.　Equity/Inequity and TMI

けなさ”では右上りとなっており，心理的緊張が利得不足，利得過剰の両方向に向って生じることを示している。この結果は Homans (1961, 1974) の主張と一致するものである。また，“満足感” (Fig. 3) と“幸福感” (Fig. 4) は，共に有意な2次傾向を示している（共に $p<.005$)。“満足感”と“幸福感”のいずれにおいても，若干利得過剰 (SOB) 群と極端な利得過剰 (GOB) 群の間に有意な差が認められ（いずれも $p<.005$)，利得が極端に過剰な場合も，極端に不足している場合と同様，情緒的に好ましくない反応を示すことがわかった。Fig. 5 に示される情緒的変数の合成変数である Total Mood Index にこれらの傾向がより鋭敏に顕れている。心理的緊張の度合いが，最も低かったのが公平 (EQT) 群ではなく SOB 群である点は若干理論とずれるところであるが，EQT と SOB 両群間に有意な差はなく，仮説1はおおむね支持されたといえるようである。

次に inequity の程度と行動傾向との関係であるが，Table 3 の ISI と IPI および Fig. 6, Fig. 7 はその結果を示したものである。“友人との約束を断ってでも彼（彼女）とのデートに応じる”など自分の Inputs を高めようとする，すなわち，相手にもっと尽くそうとする行動傾向を表わす ISI 得点は，SOB 群で最も高く，片や，“頻繁に電話をしたり手紙を書くことを相手に望む”など相手が自らの Inputs を高める行動を取ってくれることを望む IPI 得点は，若干利得不足 (SUB) 群で最も高くなっており，共に2次の傾向を示している ($p<.005$ と $p<.05$)。つまり，交換関係において，相対的に有利な利得を得ている人は自分の貢献を高めることで不公平を低減しようとし，相対的に不利な利得しか得ていない人は相手の貢献を高めることで不公平を低減しようとしている，ということができる。しかしながら，これらのことも利得の過不足が軽微である場合 (SOB と SUB) に限っていえるのであって，Fig. 6 と Fig. 7 に示されるように利得の過不足が極端な場合 (GOB と GUB) には，Inputs を高めようという意図は著しく低下してしまうのである (t 検定の結果，Fig. 6 の SOB と GOB 間は $p<.005$, Fig. 7 の GUB と SUB 間，および，SOB と GOB 間は共に $p<.05$ で有意な差がみられた)。

これらの傾向は，inequity の程度と結婚の意図の関係に，より典型的に顕れている（Table 3 の最右列および Fig. 8)。結婚の意図は，2次と4次の傾向が有意であっ

Table 3
Relationship Between Equity／Inequity of a Romantic Relationship and ISI, IPI and Marriage Intention (Trend Analysis)

Equity／Inequity	*n*	ISI	IPI	Marriage Intention
GUB (Greatly Under Benefited)	20	3.42	3.98	.70
SUB (Slightly Under Benefited)	20	4.92	6.39	2.25
EQT (Equitably Treated)	20	4.79	4.12	1.70
SOB (Slightly Over Benefited)	20	5.35	4.40	3.00
GOB (Greatly Over Benefited)	20	1.99	2.76	.80
Source	***df***	***F*** **Values**		
Between	4	3.83	2.70	3.69
Linear trend	1	1.18	3.22	.35
Quadratic trend	1	11.68***	4.05*	8.85***
Cubic trend	1	1.07	.60	.76
Quartic trend	1	1.39	2.91	4.80*
Within	95			
Total	99			

* $p < .05$
** $p < .01$
*** $p < .005$

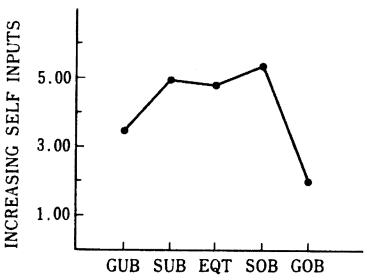

Fig. 6. Equity/Inenity and ISI

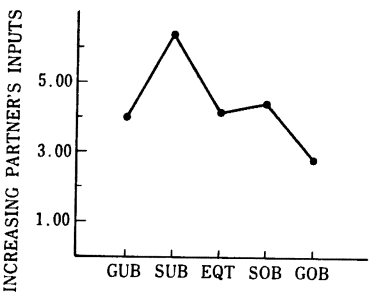

Fig. 7. Equity/Inequity and IPI

た（$p<.005$ と $p<.05$）。Fig. 8 に示すとおり，EQT（公平）群で比較的低く，SUB 群と SOB 群で高くなり，両端の GUB 群と GOB 群では著しく低くなっている（GUB と SUB 間，SOB と GOB 間，EQT と SOB 間

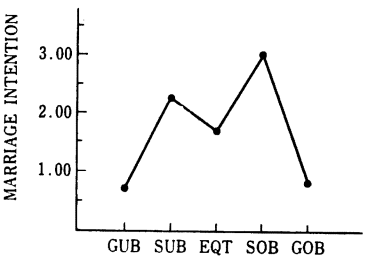

Fig. 8. Equity/Inequity and Marriage Intention

は，いずれも $p<.005$ で有意差あり，但し，SUB と EQT 間は *n.s.*）。すなわち，結婚の意図は，二人の関係がちょうど公平であると認知された場合に最も高くなるのではなく，不公平で，しかもその程度が比較的小さい場合に最も高くなっており，さらに，inequity の程度が極端に大きい場合には結婚への動機づけは著しく低下していたのである。本研究の結果は，関係は公平である方が安定性があるという“Matching Hypothesis”(Walster, Berscheid & Walster, 1973) における主張を支持するというよりはむしろ，inequity 低減もしくは解消の方法に関する Adams (1965) の主張を支持するものと考えられる。すなわち，本研究の恋人たちにとって結婚は，相対的に“尽くされすぎている”と感じている場合には Inputs を高めて equity を回復する行動的方法であ

り，“尽くしすぎている”と感じている場合には相手のInputsを高める行動的方法として機能していたようである。従って，inequityの程度が極端に大きくなり，結婚によってもequity回復に多大の努力を必要とするような事態になると，行動はむしろ関係の破棄の方向に動機づけられていたということができるのである。

以上から，仮説2も支持されたということができる。

なお，認知されたinequityの程度と交際期間との間には有意な関係はみられなかった。性差に関しては，ISIとIPIにおいて女性の方がより顕著な2次傾向を示した点が注目される。これは，恋愛関係が女性にとってより重要な社会的交換関係であることのあらわれと解釈することができよう。

考　　察

Adams & Freedman (1976) に従えば，Walster *et al.* (1973) のモデル（式1）は，明瞭な構造とより広範囲な予測性を有する精緻なモデルであるということができ，これを用いた諸研究（Traupman, Petersen, Utne & Hatfield, 1981; Walster *et al.*, 1978b）で注目すべき結果が報告されている。本研究ではこのモデルを用い，現実に恋愛関係にある恋人たちを対象に，Equity理論の妥当性を検討した。本研究の結果は，①認知されたinequityの程度が大きいほど恋人たちの感じる心理的緊張も大きく，②その認知されたinequityの程度に応じて，恋人たちは，inequityを低減もしくは解消させる行動に動機づけられる，というものであった。すなわち，認知されたinequityと情緒的反応の関係は，単に，利得不足の場合に“腹立たしさ”を，利得過剰の場合に“申し分けなさ”を感じるだけでなく，“満足感”や“幸福感”においてもinequityの程度が大きい場合には，たとえ利得過剰であっても，利得不足同様，反応が否定的になるというものであった。さらに，inequity低減もしくは解消の方法に関しても，inequityの程度が軽微である場合には現実のInputsやOutcomesを変化させてequityを回復させようとするが，inequityの程度が過大でInputsやOutcomesの増減によるinequityの低減が困難である場合には，関係を断つことによってinequityの解消をはかるというものであった。

これらの結果は，ゲーム事態ではあるが，西川・広田 (1978) の実験結果とも一致するものであり，共に，Equity理論の主張するところを強く支持するものであるといえる。特に，inequityの低減もしくは解消の方法に関する本研究の結果は，2つの行動的方法が現実にとられうることを検証するものといえよう。さらに，inequity値x（式1，式2，式3）に基づく5段階による傾向分析の結果は，Equity理論における仮説を実証するに留まらず，親密な関係における人間の相互行為に関する，より詳細な示唆に富む情報を提供するものであった。このことは，とりもなおさず，本研究で用いられたWalster *et al.* (1973) のモデルの妥当性を検証するものであるといえる。

しかしながら，既に述べたように，本研究の結果は，inequityの程度と情緒的反応の関係，すなわち“inequityは緊張を生じ，その強さはinequityの程度に比例する”という命題に関して，理論の主張と完全に一致するものではなく何ほどかのずれを見せている。それら本研究の問題点や今後の課題について若干の考察を試みたい。

まず問題の第一は，認知されたequity-inequityと情緒的反応の関係が，equity（公平）である場合に最も肯定的になるのではなく，交換関係が若干有利な場合に最も肯定的になるという点である。別な言い方をすれば，心理的に負担にならない程度で少し得をしている状態が心理的に最も好ましいという点である。本研究と同じ方法で対象者をペアでとった研究において，“尽くされすぎている”と感じている人の相手もまた“尽されすぎている”(56%) と感じており，必ずしも“尽くしすぎている”(25%) とは感じていないことが見出されている（藤田，1981）。これは，交換関係におけるequity-inequityの算定が実際と認知とでは必ずしも一致せず，その結果，情緒的に肯定的な状態にある恋人たちが関係を“尽くされすぎている”と認知したと解釈される。ここでもまた，なぜ，情緒的に最も肯定的な状態が“少し尽くされすぎている”との認知に繋がるのかという点が問題になる。

この問題は，先に触れた「合理性命題」(Homans, 1974) と関連すると考えられる。Walster *et al.* (1978a) もその命題の1つに挙げているように“人はその利得が最大になるよう努力する”のであり，この利得最大の原理は1次関数として表わされる。いま仮に，行為の生起率を情緒的反応に置きかえてこれをyとし，equity-inequityの程度をxとするならば，$y=ax+b$ の式が成り立つ（但し，aとbは定数，かつ $a>0$）。片や，「分配公正」の原理は既に見たように2次の関係である。すなわち，$y=cx^2+dx+e$ で表わされる（但し，c, d, eは定数，かつ $c<0$）。xを横軸に，yを縦軸にした場合，このグラフの頂点のx座標は理論からEQTであり，EQTは式より $-d/2c$ となる。「利得最大」と「分配公正」の両原理を合わせた合成関数は $y=cx^2+(a+d)x+b+e$ で表わされ，そのグラフの頂点のx座標は $-(a+d)/2c$

となり，これは，EQT ではなく EQT より SOB 寄りとなる［{−(a+d)/2c}−(−d/2c)=(−a/2c)，a>0，c<0 から (−a/2c)>0］。すなわち，人は社会的相互行為において，その交換関係がちょうど公平である場合に情緒的に最も肯定的になるのではなく，公平よりも少し利得過剰である場合に最も肯定的になるということが理論的に導かれるのである。本研究の対象者も，「利得最大」と「分配公正」の合成された原理で情緒的に反応していたのであろう。しかし，この解釈の可否については今後の検証を待たなければならない。

第二に，本研究では inequity の算定は認知に基づいて行なわれたが，inequity の認知と実際のずれの問題である。恋愛関係が経済的あるいは物理的交換関係とは異なり正に心理的関係である点を考えれば，認知された主観的な inequity こそが意味を持つということができる。しかし，恋愛関係に限らず一般に社会的交換関係において生じると考えられる認知と実際のずれは，どんな場合に大きく，どんな場合に小さいかなど，心理的変数として注目，検討されるべきであろう。

第三は，inequity の認知と情緒的反応の因果関係の問題である。関係を非常に不公平だと認知した人が情緒的に否定的な反応を示す一方，情緒的に非常に肯定的であれば自分が損をしているとは認知しない，本研究の結果に即していいかえれば，少し得をしていると認知する，という逆方向も考えられるので，恋愛関係を，まだ交換関係が始まったばかりの初期の段階から，交換関係が比較的安定してくると考えられる結婚直前まで，恋愛関係の発達段階に分け，先の“ずれ”との関連で，どの段階でこの“ずれ”が最大になり，どの段階で最小になるか，また，その場合の情緒的反応との関係はどうかなど，因果関係の分析のモデル（Kenny, 1975）に照して検討する必要があろう。

第四に，Inputs と Outcomes の数量化の問題である。窪田（1979）は Equity 理論が金銭の交換関係を超えて適用範囲の拡張を目指す以上，Inputs や Outcomes として考えられる要因に関して，間隔尺度以上の尺度化を可能ならしめる数量化が必要であると述べている。本研究での Inputs と Outcomes の取扱いは必ずしもこの要請を満たすものではないが，本研究で構成した ISI, IPI の両尺度は，恋愛関係における総 Inputs と総 Outcomes の要因の選択に関する多くの情報を提供するものであった。要因の重要度を加味することにより，equity-inequity の算定をより妥当なものにすることが可能であると考えられる。

本研究で扱われたのは，親密な関係でも恋愛関係という限られた範囲のものであったが，行動傾向としての結婚の意図において有意な4次傾向がみられたことは興味深い。職場関係や援助行動などの分野においても，果して，同じような4次傾向がみられるかどうか，仮にみられるとして，その変曲点はどのようにして決まるのかなど，解明すべき問題は多い。また，Equity 理論が行動決定論的に支持されたというには，equity 回復に向う各要因の変化が予測されなければならないし，さらに，人間の社会行動の一般理論としては，あらゆる相互行為が Equity の原理によって説明されることが実証されなければならない。むしろ残された部分の方が大きいというべきであろう。併せて今後の課題としたい。

要　　約

本研究は，Equity 理論を恋愛関係にあてはめ，認知される inequity の程度による心理的変数の相異をみると同時に Equity モデルの妥当性を検討することを目的とする。特に equity 回復の行動的方法の検証を試みる。対象者は現実に恋愛関係にある男女学生各50名計100名。質問紙により，equity-inequity の認知，情緒的反応，自分の Inputs を高める行動傾向，相手が Inquts を高めることへの期待，結婚の意図，交際期間が測定された。認知された inequity の5段階による傾向分析の結果，①認知された inequity の程度が大きいほど恋人たちの感じる心理的緊張も大きく，②その認知された inequity の程度に応じて，恋人たちは，inequity を低減もしくは解消させる行動に動機づけられるという Equity 理論をおおむね支持するものであった。すなわち，情緒的反応は，認知される inequity が大きくなると，利得過剰であっても利得不足同様否定的となった。また，行動傾向に関しては，認知される inequity が小さい場合には，利得過剰の人は自分の Inputs を高めることで，利得不足の人は相手の Inputs を高めることで equity の回復をはかろうとしたが，認知される inequity の程度が大きくなると，行動はむしろ関係の破棄の方向に動機づけられることがわかった。本研究の結果と仮説との若干のずれに関して，「分配公正」と「利得最大」の両原理の合成による検討が試みられた。

引 用 文 献

Adams, J. S. 1965 Inequity in Social Exchange. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 2. New York: Academic Press, 267-299.

Adams, J. S., & Freedman, S. 1976 Equity Theory Revisited: Comments and annotated

bibliography. In L. Berkowitz & E. Walster (Eds.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 9. New York: Academic Press, 43-90.

Edwards, W. 1954 The Theory of Decision Making. *Psychological Bulletin*, **51**, 380-417.

Feingold, A. 1981 Testing Equity as an Explanation for Romantic Couples "Mismatched" on Physical Attractiveness. *Psychologlcal Report*, **49**, 247-250.

Festinger, L. 1957 *A Theory of Cognitive Dissonance*. Evanston Ill.: Row Peterson.

Fishbein, M., & Ajzen, I. 1975 *Belief, Attitude, Intention and Behavior: An introduction to theory and research*. Addison-Wesley.

藤田美幸 1981 Equity 理論に関する一考察 関西学院大学社会学部卒業論文.

Homans, G.C. 1961, 1974 *Social Behavior-Its Elementary Forms*. Harcourt Brace Jovanovich, Inc.

ジョージ・C・ホーマンズ 橋本茂訳 1978 社会行動—その基本形態 誠信書房.

Kenny, D.A. 1975 Cross-Lagged Panel Correlation: A Test for Spuriousness. Psychological Bulletin, **82**, 887-903.

窪田由紀 1979 Equity 理論に関する一考察 —特に数量化の問題を中心に— 実験社会心理学研究, **18**, 153-159.

Mitchell, T.R. 1974 Expectancy Models of Job Satisfaction, Occupational Preference and Effort: A theoretical, methodological, and empirical appraisal. *Psychological Bulletin*, **81**, 1053-1077.

西川正之・広田君美 1978 分配報酬の過剰・不足状態における平等規範の検討 実験社会心理学研究, **18**, 57-65.

Rosenberg, M.J. 1956 Cognitive Structure and Attitudinal Affect. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **53**, 367-372.

Traupmann, J., Petersen, R., Utne, M., & Hatfield, E. 1981 Measuring Equity in Intimate Relations. *Applied Psychological Measurement*, **5**, 467-480.

Walster, E., Berscheid, E., & Walster, G.W. 1973 New Directions in Equity Research. *Journal of Personality and Social Psychology*, **25**, 151-176.

Walster, E., Walster, G.W., & Berscheid, E. 1978a *Equity: Theory and Research*. Boston: Allyn and Bacon.

Walster, E., Walster, G.W., & Traupmann, J. 1978b Equity and Premarital Sex. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 82-92.

—1984年5月10日　受稿, 1984年11月7日　受理—

AN EXAMINATION OF EQUITY THEORY IN DATING COUPLES' INTIMATE ROMANTIC RELATIONSHIPS

KAZUKO INOUE
Kwansei Gakuin University

ABSTRACT

This study was designed to investigate whether Equity Theory can be applied to dating couples' intimate romantic relationships. Male and female steady daters were divided into 5 categories according to the degree of equity-inequity in their relationships. Relationships beteen the degree of equity-inequity, and emotional responses, behavioral tendency and marriage intention were examined. The results demonstrated that the more ineqitable daters perceived their relationships, the more distress they felt, and they tried to restore equity in some ways according to the degree of inequity. More precisely, significant quadratic trends were found in relationships between the degree of inequity, and total mood index, behavioral tendency and marriage intention. Those slightly over benefited tried to increase self inputs, and those slightly under benefited tried to increase partrers' inputs. But those greatly over or greatly under benefited were tempted to sever their relationships. Findings were discussed in view of social exchange theory.

Key words: interpersonal processes, social exchange, equity theory, romantic rlationship, trend analysis.